

## ウイグル語における動詞の使役を表す形式

藤家洋昭 (大阪大学)    Reyihan Pataer (甲南女子大学)

### 1. はじめに

ウイグル語は、類型論的にこう着語に分類され、形式と意味がかなりの程度一致する言語である。動詞の形態に関しても、テンス、人称等を表す形式を明確に抽出することができる。受身・使役などのボイスに関しても同様で、いわゆるウイグル語伝統文法<sup>[1][2]</sup>においても、ボイスを表す形式について記述されている。このため、何が使役を表すかといったことに関してはすでに明らかになっていると言える。しかしながら、後述するように、ウイグル語には使役を表す形式が複数存在するが、それらの間の違いが何を意味するかということに関しては必ずしも明らかにされていない。そこで、本研究ではウイグル語の使役を表す形式を、語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure) の枠組みにもとづいて記述して分析する。

### 2. 基本データ

本研究で扱うのは、ウイグル語伝統文法<sup>[1][2]</sup>で、"mejburiy derije" と呼ばれている、使役を表す形式である。これらは、動詞語幹に付いて、使役動詞語幹とでもいうべき語幹を形成する。これら使役を表す形式には、具体的には、次のようなものがある。

-dur (~dür~tür~tur), -ghuz (~güz~küz~quz), -t, -er (~ar, -ur~ür), その他特殊な形<sup>[1]</sup>。かつこの中に示したのは、母音調和と子音同化による異形態である。これらについて、これまで記述されていること<sup>[1]</sup>を見ていく。

(母音調和と子音同化による異形態を除いた) 各形式の違いが何によるかは、基本的には現れる環境の音韻的な条件による。

**-dur, -ghuz:** 動詞語幹が、-ey~ay, -er~ar 以外で終わるものに付く<sup>[1]</sup>。例: yaz-「書く」, yazdur-, yazghuz-; küt-「待つ」, küttür-, kütküz-  
**-t:** -ey~ay, -er~ar で終わるものと母音で終わるものに付く<sup>[1]</sup>。例: azay-「減る」, azayt-; aqar-「白くなる」, aqart-; oyna-「遊ぶ」, oynat-  
**-er, -ur:** -ch または -sh で終わる単音節の語幹に付く<sup>[1]</sup>。uch-「飛ぶ」, uchar-, uchur-

以上のように、各形式の違いは基本的には音韻的条件による出現環境にある。しかし、あくまでも基本的にあって、-dur と -ghuz については、音韻的条件による出現環境ではなく、意味に違いがあることが記述されている<sup>[1]</sup>。すなわち、-dur が強制的な使役を表すのに対し、-ghuz は許可あるいは動作の実行の条件を整える<sup>[1]</sup>。

統語的な観点、特に格がどうなるかをみると、対応する自動詞文の主語は使役文では対格になる。

#### (1) Tursun béketkiche mangdi.

トルスン(人名) 駅まで 歩いた「トルスは駅まで歩いた。」

#### (2) Gülnar Tursun・ni béketkiche mang・ghuz・di.

グルナル(人名) トルスン・対格 駅まで歩・ghuz・過去「グルナルはトルスを駅まで歩かせた。」

対応する他動詞文の主語は使役文では与格になる。



グルナル(人名) トルスン・へ 服を 着 *dür* 過去「グルナルはトルスンに服を着せた。」

(7) *Gülнар Tursun'ghа kiyimni kiygüzdі.*

グルナル トルスン・へ 服を 着 *güz* 過去「グルナルはトルスンに服を着させた。」

#### 4.1.1 被使役者の違い

被使役者(causee)が異なることによって容認性が変化するか検証する。被使役者の *Tursun* を it「犬」に変えてみる。

(8) *Gülнар itqа kiyimni kiy·dür·dі.*

グルナル 犬・へ 服を 着·*dür*·過去「グルナルは犬に服を着せた。」

(9) \**Gülнар itqа kiyimni kiy·güz·dі.*

グルナル 犬・へ 服を 着·*güz*·過去

このように、*kiygüzdі* を用いた文は容認されなくなり、被使役者によって容認性が変化することがわかる。

#### 4.1.2 副詞的修飾語による修飾

次に、日本語についての先行研究<sup>[4]</sup>を参考に、副詞的修飾語による修飾の解釈の違いを見る。「2階で」を表す *2-qewette* を用いて意味を観察する。

(10) *Gülнар 2-qewette Tursun'ghа kiyimni kiy·dür·dі.*

グルナル 2階で トルスンに 服を 着·*dür*·過去

(11) *Gülнар 2-qewette Tursun'ghа kiyimni kiy·güz·dі.*

グルナル 2階で トルスンに 服を 着·*güz*·過去

両方の文とも容認されるが、表す意味が異なる。*kiygüzdі* を用いた方は、*2-qewette* という副詞的修飾語が、*Gülнар* の動作と *Tursun* の動作の両方あるいは片方を修飾すると理解することができる。これに対して、*kiydürdі* の方は、両方にかかる解釈が不可能である。

## 4.2 分析

上で見た容認性の解釈の違いについて、従来言われているような、強制使役かどうかの違いでは満足 of いく説明がなされないと考える。本研究では LCS を用いて分析し、違いを説明する。

### 4.2.1 LCS による記述

#### 4.2.1.1 *kiy-*

まず、*kiy-* を次のように分析する。

[[[1] ACT ON-2] CAUSE [BECOME [2] BE AT-1]]

この分析が意味するのは、**1**が**2**に働きかけた結果、**2**が**1**にある、ということである。例に即して具体的な値を入れてみると、*Tursun* が服に働きかけ、その結果服がトルスン (の表面) にある状態になる、ということになる。

#### 4.2.1.2 *kiydür-*

次に、*kiydür-*を次のように分析する。

[[[1] ACT ON-2] CAUSE [BECOME [2] BE AT-3]]

この分析が意味するのは、**1**が**2**に働きかけた結果、**2**が**3**にある、ということである。例に即して具体的な値を入れてみると、*Gülнар* が服に働きかけ、その結果、服が *Tursun* (の表面) にある状態になる、ということである。

#### 4.2.1.3 *kiygüz-*

*kiygüz-*の分析は次のようになる。

[[[1] ACT ON-3] CAUSE [[ 3] ACT ON-2] CAUSE [BECOME [2] BE AT-3]]

この分析は、**1**が**3**に働きかけた結果が、**3**が**2**に働きかけた結果 **2**が**3**(の上)にある、ということを引き起こす、ということを表す。例に即して具体的な値を入れてみると、*Gülнар* が *Tursun* に働きかけた結果が、*Tursun*

が服に働きかけた結果、服が Tursun(の表面)にある状態を引き起こす、というようになる。つまり、二通りの解釈が可能なのは、ACT ON が二つ含まれるからであり、ACT ON がひとつしかない kiydür- の方では二通りの解釈が不可能になる。

#### 4.2.2 被使役者の違いの分析

被使役者の違いによる容認性の違いを考える。

(12) \*Gülнар itqa kiyimni kiygüzdi. = (9)

が容認されないのは、kiygüz- の LCS である、  
[[1] ACT ON-3] CAUSE [[ 3] ACT ON-2] CAUSE [BECOME [2] BE AT-3]]

の [3] の位置に it 「犬」が入るからである。[3] は ACT の主語相当に入ることになるが、ACT の主語相当は、通常、意思をもって活動するものである。犬は、服を着るに関しては通常、意思を持って活動することができないので、そぐわない。このためこの例文は容認されないということになる。

(13) Gülнар itqa kiyimni kiydürdi. = (8)

はどうかというと、kiydür- の LCS である、  
[[1] ACT ON-2] CAUSE [BECOME [2] BE AT-3]]

では、it 「犬」は BE AT の項である [3] の位置に入るが、この場合は ACT の場合のような制限なく、容認される。

#### 4.2.3 副詞的修飾語の解釈の違い

次に副詞的修飾語の例を考える。

(14) Gülнар 2-qewette Tursun'gha kiyimni kiygüzdi.

に二通りの解釈が考えられるのは、2-qewette が ACT を修飾するとすると、kiygüz- の LCS である、

[[1] ACT ON-3] CAUSE [[ 3] ACT ON-2] CAUSE [BECOME [2] BE AT-3]]

に、ACT が二つあるからである。kiydür- の方は、

[[1] ACT ON-2] CAUSE [BECOME [2] BE AT-3]]

という LCS であり、この LCS には ACT が一つしかないため、

(15) Gülнар 2-qewette Tursun'gha kiyimni kiydürdi.

の解釈も一つということになる。

## 5. まとめ

ウイグル語の使役を表す形式で、一つの動詞語幹に複数の種類の形式が付き得る場合に、その違いを LCS を用いて記述し分析し明らかにした。

## 参考文献

- [1] Arslan Abdulla (ed.). (2010). *Hazirqi Zaman Uyghur Tili. Ürümchi. Shinjang Xelq Neshriyati.*
- [2] Arziyev R. (2006). *Uyghur Tili. Almuta. Mektep.*
- [3] Sag I. A. & Wasow T. (1999). *Syntactic Theory: A Formal Introduction. CSLI.*
- [4] 柴谷方良 (1984) 「膠着語とは何か」 鈴木一彦 林巨樹編集『研究資料日本文法 5』明治書院.
- [5] 影山太郎 (1999) 『形態論と意味』くろしお出版.
- [6] 影山太郎 (編) (2001) 『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店.
- [7] 今泉志奈子・郡司隆男(2002), 「語彙的複合における複合事象」伊藤たかね(編)『文法理論:レキシコンと統語』東京大学出版会.
- [8] 影山太郎 (編) (2009) 『日英対照 形容詞・副詞の意味と構文』大修館書店.